



LINKAI 横浜金沢

学生が取材に行く

～企業の取材に行くので、怖い企業だと嫌だなと思ったら、働く人達は気さくで良い人が多く働きがいのある職場だったと気づいた件2～

企画 & 制作: 横浜市金沢区役所区政推進課

取材 & 協力: 関東学院大学 友野和哲研究室、堀田智哉研究室・横浜市立大学 中西正彦ゼミナール

2024年3月発行



LINKAI 横浜金沢

学生が

取材に行く

働きがいのある職場

だったと気づいた件

企業の取材に行くので、怖い企業だと嫌だなと思ったら、働く人達は気さくで良い人が多く働きがいのある職場だったと気づいた件2



関東学院大学
×
横浜市立大学
学生による学生のための
LINKAI 横浜金沢



“LINKAI 横浜金沢”とは



LINKAI横浜金沢は、金沢区臨海部の埋立地に造成された大規模産業団地です。
“LINKAI”には、「臨海」という意味の他に
LINK(絆／つながり)とAI(愛／合い)の二つの意味を持ち、
「多くの企業が集まり操業する、働く魅力のある地域に、人が集まり、
共に将来へ進みたい(つなぎあい、えがくみらい)」という思いが込められています。



LINKAI's Data

(令和3年度 経済センサス調査)

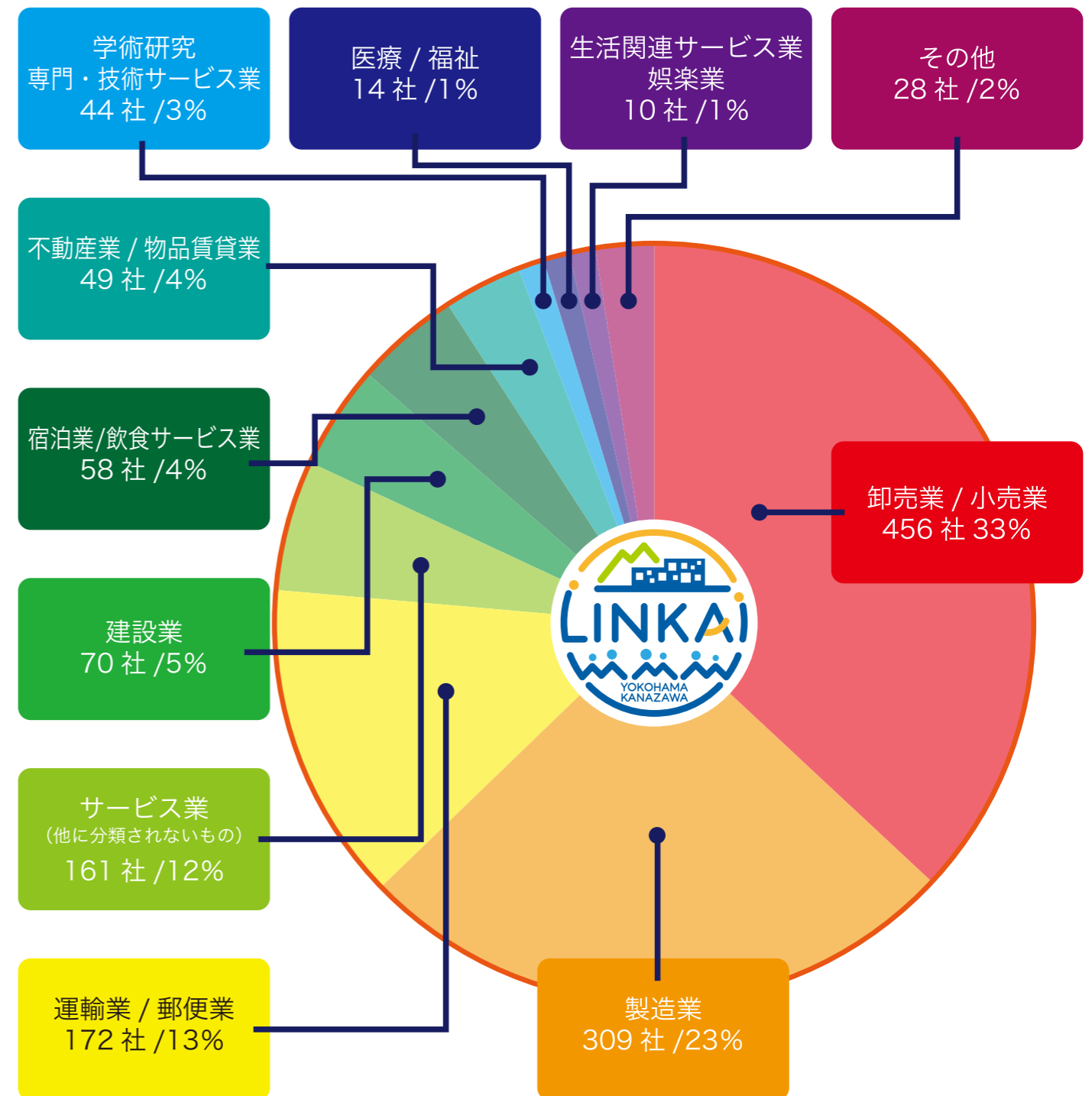
LINKAI横浜金沢の従業員数

35,875人

LINKAI横浜金沢の企業・事業所数

1,371 企業・事業所

産業別分類内訳



※端数処理の都合につき、個々の集計値の合計が100%とはなりません。

金沢区・LINKAI横浜金沢 Area Map



大規模な産業団地

約5.425km²の広大な埋立地は、東京ディズニーランド約11個分の大きさです。

LINKAIへのアクセス

LINKAI横浜金沢を縦断して走る「金沢シーサイドライン」が、働く人々の通勤の足として活用されています。新杉田駅から金沢八景駅までを約25分で結び、車窓からは豊かな海を背景にたくさんの工場を眺めることができます。

また国道357号や首都高速湾岸線が走るなど、道路網も整備され、物流の動脈としても機能しています。

鳥浜工業団地

横浜市の根岸湾埋立事業により造成されました。鳥浜町には、製造業を中心に約400の企業・事業所が集積しています。

金沢産業団地

横浜市の金沢地先埋立事業により造成されました。幸浦・福浦には様々な業種の約800の企業・事業所が集積しています。

白帆地区

金沢木材港を利用して造成されました。白帆地区にはマリーナ施設や大型商業施設が立地しています。

キャンパスタウン金沢

金沢区にある関東学院大学には約8,000人、横浜市立大学には約5,200人の学生が通学しています。

この2つの総合大学があるという金沢区ならではの強みを生かし、大学と区が連携することで、両大学の知識や施設だけでなく、大学生の発想力や行動力を生かし活力ある個性豊かなまち「キャンパスタウン金沢」を目指しています。

関東学院大学

神奈川県内に3つのキャンパスを構える関東学院大学は、11学部14学科9コースに加え、5研究科を擁する総合大学です。自治体や地域、企業と連携して社会課題の解決に取り組む「社会連携教育」を通じた実践的な学びに取り組んでいます。

横浜市立大学

国際都市横浜で学び、グローバルに活躍できる人材育成を目指す横浜市立大学は、国際教養学部、国際商学部、理学部、データサイエンス学部、医学部(医学科、看護学科)の5学部6学科に加え6つの研究科と、附属2病院を擁する総合大学です。



働く魅力ある、 人が集まる産業団地を目指して

「学生による学生のためのLINKAI横浜金沢」

LINKAI横浜金沢にはたくさんの魅力があふれています。ですが、この魅力があまり知られておらず、若手人材の確保が課題となっています。

産業団地といってもそれぞれの企業がどういった製品をつくり、サービスを提供し、どのように社会に貢献しているのか。そこが見えてこなければ「働く魅力ある、人が集まる産業団地」を実現することは難しいでしょう。

LINKAI横浜金沢を認識し、知ってもらうために、金沢区の大学に通う学生が企業を取材し、就職を控えた同じ大学に通う学生たちに向けて、魅力を発信していきます。

学生が企業に聞きたい5つのこと

就職活動を控えた学生が気になる企業に聞きたい5つの「取材テーマ」を設定しています。その中から各グループ2つを選択し、LINKAI横浜金沢で実際に働く方々に取材をしました。

- Theme① 学生が聞きたい！企業が欲しい人材とは！
- Theme② 学生が聞きたい！学生時代にやっておくべきこと！
- Theme③ 学生が聞きたい！仕事のやりがいと働く環境！
- Theme④ 学生が聞きたい！キャリア設計と人材育成！
- Theme⑤ 学生が聞きたい！力を注ぐ、地域貢献・社会貢献活動！

今作は第2弾です。第1弾は二次元コードよりご覧いただけます。



学生が 取材に行く

目次 CONTENTS

企業の取材に行くので、怖い企業だと嫌だなと思ったら、働く人達は気さくで良い人が多く

働きがいのある職場

だったと気づいた件2

- 01-02 “LINKAI 横浜金沢” とは
- 03-04 金沢区・LINKAI 横浜金沢 Area Map
- 05-06 本誌のテーマ／目次 CONTENTS
- 07-08 株式会社ウイッシュボン 関東学院大学 友野和哲研究室
- 09-10 公益財団法人神奈川県予防医学協会 横浜市立大学 中西正彦ゼミナール
- 11-12 協立金属工業株式会社 横浜市立大学 中西正彦ゼミナール
- 13-14 株式会社グーン 横浜市立大学 中西正彦ゼミナール
- 15-16 コーケン化学株式会社 関東学院大学 友野和哲研究室
- 17-18 株式会社新鋭産業 横浜市立大学 中西正彦ゼミナール
- 19-20 株式会社チューブフォーミング 関東学院大学 堀田智哉研究室
- 21-22 株式会社南武 関東学院大学 友野和哲研究室
- 23-24 横浜エレベータ株式会社 関東学院大学 堀田智哉研究室
- 25-26 株式会社横浜シーサイドライン 横浜市立大学 中西正彦ゼミナール
- 27-28 学生座談会 Students symposium
- 29-30 著作・編集学生一覧 Students List / 編集後記 Editor note

お菓子づくりを通じて 幸せな笑顔と思い出をつくる会社ウイッシュボン



<ウイッシュボンとは？>

株式会社ウイッシュボンは昭和56年創業で、1軒のカフェテラスを横浜で開店したところから歴史が始まります。当時は、レストランで扱うようなデザートを製造する会社が少なかったようで、そこに着目した創業者の永野毅さんは「レストランでのデザート(食事の縮めに食べるもの)や、お土産のデザートが美味しければ、その日の思い出はその人の心に強く残るのでは？」と考え、お菓子作りに取り組み始めました。

社名のウイッシュボンは「希望・願い(WISH)」とフランス語の「良い(BON)」を組み合わせた造語です。

「お菓子づくりを通じて、光に満ちた希望を皆様にお届けします」を企業理念にウイッシュボンは日々発展しています。

現在は自社ブランド及び他社のブランドで販売するOEMによるお菓子の製造・販売のみならず、SDGsとして世界の貧困や子供の未来を応援する活動への寄付、プラスチックやフードロスの削減、FSC認証(適切な森林管理を認証する国際的な制度)を受けた紙パッケージを積極的に扱うなど様々な取組を実施しています。



株式会社ウイッシュボン

<商品に対するこだわり>

皆さんは、「お菓子の製造」と聞くとどのような製造過程を想像しますか。テレビなどで一度は見たことがある方も多いと思いますが、機械での製造が主流かと思えます。しかし、ウイッシュボンさんでは一部を手作業にすることで「手作業だからこそできるお菓子」の製造に成功しています。

横浜土産の定番で、ウイッシュボンさんの看板商品「横濱レング通り」は、2001年に販売を開始して22年続く自慢のロングセラーです。この商品は、ローストしたアーモンドに自家製の生キャラメルを絡め、クッキー生地をサンドし焼き上げたお菓子です。自家製生キャラメルは天候や湿度、季節ごとに合わせて安定したおいしさを保つため、手作業でこだわりながら製造しています。

また、衛生管理もとても重要です。個装の際に金属探知機を設置し金属異物混入を防いだり、個装内の脱酸素剤のチェックを1つ1つ丁寧にしています。その他にも箱の汚れや破れ、印刷エラーはないか、賞味期限は見やすいように濃く印字されているかなど、機械だけで自動的に検知するのではなく、従業員さんがダブルチェックしています。自慢の商品を多くのお客様に安心しておいしく食べてもらえるように、手間暇を惜しまない丁寧な作業によって、ウイッシュボンさんのお菓子は唯一無二のものになっています。



<関東学院大学の先輩がいた>

なんと私たちの先輩が4名も働いていました。お菓子メーカーということもあり、学生時代お菓子作りを学んだ方が大半だと思っていましたが、専攻が異なる方が多いそうです。大切なのは「学び続けること」だと教えていただきました。

今回の取材では、先輩である2名に会社の魅力や雰囲気などを伺いました。

Q ウイッシュボンへ就職した理由は何ですか？

A 第一にお菓子が好きであるということです。また説明会での永野健一社長の企業理念や人柄の良さに惹かれたことがきっかけです。

Q 仕事のやりがいは何ですか？

A 製造というお客様に直接接する機会がない部門に所属していますが、毎月の売上が従業員全員に共有されるんです。毎月の売上が耳に入るたび、会社のために貢献することができたと嬉しく思います。

Q 大学生のうちにやっておくとよいことはありますか？

A やりたいと思ったことをやり遂げることです。社会に出ると自分の時間は本当に少なくなります。やりたいと思ったことも中々できないのが現状です。なので、今のうちに後悔なくやりたいことをやり遂げることが大切です。

<社長に伺うウイッシュボン>

最後に、代表取締役の永野健一社長にインタビューを行いました。

Q ウイッシュボンを一言で表現するなら。

A やはり「真面目」です。食品を扱う以上守らなければならない手順があるため、決められたことをしっかりできる真面目さや誠実さを大事にしています。なので、真面目な従業員を求めています。そして、最後は「真面目」が得をするという思いがあります。売上が高くても、悪い商品は絶対に作らないです。

Q 会社を経営するうえで意識していることはありますか？

A 風通しを良くしようというところです。社長が威張ってばかりだと従業員の声聞きづらくなりますし、結果として良い商品が生まれません。1つの商品には、私だけでなく開発、製造、営業、販売など多くの従業員が関わっています。全員で良い商品をつくるためには、風通しを良くすることが一番大切だと思います。それがお客様のためでもあると思っています。

Q 今後、やりたいことはありますか？

A 新しいことよりも今あるものをより良くしていきたいです。看板商品の「横濱レング通り」は時代の変化に合わせて味や製法が少しずつ変化しています。我々がやるべきことは、既存の商品をさらに良くして、一人でも多くの方に知ってもらいたいと思います。

早期発見から命を守りそして繋げていく、 予防医学と技術の進歩と時代の変化に合わせた 健康支援

神奈川県予防医学協会(以下、「予防医学協会」)は、健康診断やがん検診のような個人の健診から職場環境や生活環境に関わる検査まで、多岐にわたる健康支援を行っている公益財団法人です。高い予防医学の技術力をもとに、各種健康診断を行い、その結果を活用して、疾病の早期発見へと繋げています。今回は尿検査、生化学検査、放射線検査、先天性代謝異常等検査、作業環境調査等の分析を見学させていただき、予防医学の現場を肌で体感してきました。

予防医学協会さんは、予防医学活動を主軸として公衆保健事業を推進し、神奈川県民の健康の増進と福祉の向上に寄与することを目的としています。1955年から続く歴史を持ち、当初は神奈川県寄生虫予防協会として発足しました。今年で創立69年を迎え、長きにわたって一人ひとりの健康な生活づくりを支援してきました。予防医学協会さんの健康支援活動は、主に「産業保健」、「地域保健」、「学校・母子保健」、「個人の健診」の4つに分かれます。

「産業保健」では、法人・個人の方への健康診断、人間ドック、専門外来、メンタルヘルス対策、作業環境測定などを行っています。

「地域保健」では、地域住民を対象に、各種がん検診や特定健康診査・特定保健指導を実施しています。

「学校・母子保健」では、神奈川県内の学校の健康診断の実施、新生児を対象とした先天性代謝異常等検査を行っています。

「個人の健診」では、人間ドックをはじめとする健康診断、診断後の事後フォローとして専門外来での受診、健康教室や健康セミナーの開催など、個々人に合った健康支援策を提供しています。このように多岐にわたる健康支援事業を展開し、新生児から高齢者までの健診を受託し、内部での一体的な健診体制が整っているのが大きな特徴です。



公益財団法人
神奈川県予防医学協会

どんな人がどのように働いているのでしょうか？
実際に放射線技師として働いている方からお話を伺いました。

予防医学協会さんは約50の部と課があります。そしてそれぞれが責任とやりがいを持ち、密接に連携し合うことで人々の健康を支えています。放射線技師の方は、「体の病気や異常を早期発見ができる仕事であり、それができたときにやりがいを感じます。また、1回でも早期発見の経験をするだけでこれからも頑張ろうと思えます。」と話してくださいました。

そんな予防医学協会さんの雰囲気は、「若い人が活躍している場」だそうです。若手で管理職に就いている方もいるそうです。キャリア支援も充実しており、資格取得のための計画を上司と相談しながら決めたり、研修の進め方が専門や業種により異なっていたりするそうで、各個人に合わせたキャリア設計ができます。そして女性管理職の割合は50%以上で、女性の働きやすさや子育てのしやすさが確保されている職場となっています。

地域に貢献する取り組み
包括的に健康を捉え、地域住民一人ひとりの健康を支えています。

予防医学協会さんでは、主に「地域保健」「母子保健」「学校保健」の面から地域貢献に力を入れています。

まず「地域保健」について、がん検診では、行政をはじめ、外部機関と連携し、地域特性に応じた活動を展開しています。2020年以降、新型コロナウイルス感染症の影響により受診率が低下しました。そのため、受診率向上の取り組みが今後の課題だといいます。また、乳がん検診についての啓発活動「ピンクリボンかながわ」が行われ、マンモグラフィ検診車が導入されています。

「母子保健」では、先述のように新生児を対象に先天性代謝異常等検査を行っています。遺伝性疾患や代謝異常を早期発見することで、疾病の予防が可能となります。

「学校保健」では、神奈川県内の児童を対象に学校保健安全法に基づく健診・検査を行っています。また、小中学校でのがん教育を通して、がんについて正しい知識を伝える支援がされています。

予防医学協会さんは、横浜市SDGs認証制度であるY-SDGs認証にて「上位・Superior」を取得しており、SDGsにおいても多分野に貢献し、実現しています。

今後も、健康診断で提供する情報と地域住民の行動を結びつける試みを続けていきます。

予防医学協会さんは、若手の活躍を後押ししてくれる働きやすい環境となっており、積極的にキャリアアップできる職場だと思いました。分野や部署が数多く分かれていることも、それによって連携を心掛けることにつながっており、風通しの良い明るい職場の雰囲気に直結していると感じました。



±0.0001mmの精度で顧客の要望に応える、 協立金属工業株式会社

協立金属工業株式会社(以下、「協立金属工業」)は、ステンレス鋼線やピアノ線を含む高強度ワイヤから銅合金線まで、様々な金属線を取り扱う素材メーカーです。長年培ってきた高度な技術とともに、しなやかな対応力で顧客の思いに応えています。普段目にする機会が少ない金属線ですが、本記事ではそこに隠された技術や情熱に迫ります。



協立金属工業さんは、金属線の加工を行う会社です。1961年に設立され、1995年に保土ヶ谷区から金沢区に移転してきました。高品質なまま0.20~0.02mmの細ささえ実現可能な伸線加工について高い技術とノウハウを持ち、幅広い素材としての金属線を提供しています。

しかし、協立金属工業さんの魅力は高品質な製品だけではありません。その魅力の一つが、柔軟な対応と丁寧なアフターケアです。強度や線径といった項目についてお客様の要望に細かに応え、必要とあれば、海外まで出向き素材の使い方等について説明を行います。会社のバリューの一つに誠実を挙げている通り、一つひとつの取引に対し直向きに取り組んでいるのです。

もう一つの魅力に、CSRの取組に非常に力を入れていることが挙げられます。地元企業への仕事の発注を優先して行うなど地域を意識した経営をしている他、地域ボランティアや海の持続可能性への投資を行うなど、幅広く社会的な事業に取り組んでいます。さらに、性的マイノリティ理解促進セミナーや早帰りデーの設置といった取組も積極的に行っており、その功績から2009年には横浜市によって横浜型地域貢献企業にも認定されています。

協立金属工業さんは、高い技術と丁寧な対応、社員を含む地域全体への思いやりといった魅力を多く持つ、「人のお世話にならぬよう 人のお世話が出来るよう」の企業理念を体現する会社なのです。

今回の取材ではまず、学生たちが学生時代にやるべきこと、働くうえで必要な能力について協立金属工業の松村社長、若手社員の方にお聞きしました。

協立金属工業さんでは、専門分野の勉強について大学時代にしっかり学習しておくべきとは考えておらず、専門的な知識は会社に入ってから学ぶことができることでした。むしろ学生たちには、何か目標を定めて、その目標に向かって何をすべきなのか自分で課題を見つけ達成できるような能力を養い、身に付けてほしいとの



ことでした。また、継続力を重要視しており、常日頃から小さなことでも継続させる習慣を身に付けることが、今後社会に出て働くうえで大切なことだと話してくれました。

学生のうちは遊ぶことにも意味があるとおっしゃっていましたが、もちろんただ遊ぶのではなく、どう遊ぶのか。計画性を持ち、他者とのコミュニケーションを積極的に取るように意識することが大事だそうです。

金沢区の企業ならではの取組も！協立金属工業さんの地域貢献・社会貢献について伺いました。

協立金属工業さんは横浜型地域貢献企業の「最上位」に認定されています。これは地域を意識した経営を行うとともに、本業及びその他の活動を通じ、環境保全、地域ボランティア等の社会的事業に取り組んでいる企業等が認定されます。

協立金属工業さんでは、工具や机、設備などの必需品の発注を地元企業へ優先的に行っているそうです。また、地元企業からの発注にも積極的に応じているそうで、地域の繋がりを形成していることがわかりました。

さらに、CSRにも積極的に取り組んでおり、特にSDGsの14番「海の豊かさを守ろう」に力を入れているそうです。具体的には、金沢区内にある海の公園の掃除や海洋学を開講している大学への寄付、サンゴやアマモの植え付けを行っており、特にアマモの植え付けは中小企業の中では珍しい取組とのことでした。海がそばにある金沢区の企業ならではの取組だと感じました。

普段気に留めることの少ない金属線ですが、そこには長年培われた高度な技術と働く方々の熱い思いがありました。皆さんも身近なところに使われている金属線に目を向けてみてはいかがでしょうか。協立金属工業さんの製品が見つかるかもしれません。



協立金属工業株式会社

Theme 1
Theme 2
Theme 3
Theme 4
Theme 5



時代に合わせて「グーン」と成長する。 そんな、社会と人々に寄り添って事業を 展開する会社。



株式会社グーン

株式会社グーンさんは産業廃棄物を取り扱う会社です。産業廃棄物をただ処理して資源化するだけでなく、現代社会の抱える環境問題に対して様々な方向から課題解決に取り組んでいます。今回の取材では、事業に関するインタビューと工場見学をさせて頂きました。



グーンさんの主な事業内容は、収集した木くず・廃プラスチック類などの産業廃棄物を燃料へ作り変えるリサイクル事業、発生した廃棄物の処理を委託したい企業と廃棄物を処理する企業を繋げるコンサルティング事業、産業廃棄物の管理に関するノウハウを諸外国に広めるグローバル事業などがあります。近年では再生プラスチックに関する事業も開始しており、これまで燃料に変えるだけだった廃プラスチック類を、新たなプラスチックの素材として再利用できる「ペレット」へと作り変えることで、より環境に優しい取組を積極的に推進しています。2001年にリサイクル事業を中心に創業した会社が、時代のニーズに合わせて事業の幅を広げ、22年目を迎えた現在、業界を牽引するまでに成長を遂げました。

私たちは、グーンさんの社員の方々に中小企業ならではの環境と働く人の思いについてインタビューしました。

中小企業の良さは、仕事を受け持っている一人ひとりの顔がしっかり見えることです。社員数は各企業によって様々ですが、全体で30人ほどの会社も多くあります。社員さんの一人は、社内での人間関係について、「その人の良いところを見つけて、この分野はあの人に任せようと思うことができる」と仰っていました。大企業と異なり、従業員間の距離が近いことで、意思疎通がスムーズであったり、仕事における信頼関係を築けたりすることが、中小企業ならではの良さだと思いました。

グーンさんの事業は、環境にやさしいリサイクル事業です。社員さんは「業務を通じて社会に貢献できているこ



とを実感できる」ととてもやりがいを感じておられました。加えて、実績を積むことで他の社員さんやお客様から信頼を得て頼られることもモチベーションになるそうです。また、仕事を引き受けすぎたこともあったが、それは自分の限界を知るきっかけになったと話してくれました。このように個人の裁量に委ねられる部分が多いところも中小企業の魅力の一つだと感じました。

次に、この会社に就職した理由をお尋ねしたところ、就職活動をしていた当時、世界全体で環境問題が叫ばれており、関心があったことと、「自分の得意分野と会社の求める人材が合致した」とのことでした。会社に必要とされて、社員さんもその居場所に馴染んでいるような、そんな雰囲気が印象的でした。

産業廃棄物処理業者だからこそできる社会貢献について伺いました。

グーンさんが行っている社会貢献の一つにNPO法人Reライフスタイルの支援があります(NPO法人Reライフスタイルは、株式会社グーン代表取締役の藤枝慎治氏が理事長を務めています)。NPO法人Reライフスタイルは、ペットボトルキャップを回収することで、途上国の子どもたちへ「認定NPO法人世界の子どもにワクチンを日本委員会(JCV)」を通じて、ワクチンの提供を行っている団体です。様々な企業や団体、個人からペットボトルキャップを回収し、樹脂メーカーに引き取られており、そのお金をJCVへ寄付することによって、ユニセフが行うワクチン接種活動に貢献しています。グーンさんの工場には、ペットボトルキャップの回収ボックスやキャップの選別作業場が設けられており、この活動に積極的に協力しています。

また、グーンさんは事業全体のさらなる脱炭素化も推進しています。具体的には、燃料材の輸送に船舶を採用したり、廃プラスチック類を新たなプラスチックの素材となる「ペレット」に作り変えたり、さらには再資源化プロセスにおける脱炭素を実現するため、5月から全面的にカーボンフリーのエネルギーを採用することも決定しています。

取材を通してグーンさんは「どうしたらより社会の為になるのか」を常に考えて、行動を起こしている会社だと感じました。環境問題に対する活動やNPO法人への支援の参画の他、この業界がサービス業ではなく、加工業・製造業として社会に認知してもらえるように一石を投じるなど、会社の利益を追求するだけではない姿勢が多く見受けられました。

最後に皆様にグーンさんの“パズルの絵”を紹介させていただきます。パズルのピースがはまっている分野は既にグーンさんが取り組んでいる事業で、まだはまっていないピースがこれから取り組むべき社会課題だそうです。この絵は様々な社会課題に対し、会社としてどう取り組むべきかを常に考え、事業を通じて一つひとつのピースを着実にはめていくグーンさんを象徴する絵であると思います。



最先端のテクノロジーで世界を支える

コーケン化学株式会社は、1973年にメッキ業を専門とする会社として設立されました。1975年には、今日の事業の核となる各種金属のフォトエッチング加工により、精密金属部品の生産を開始しました。現在はこれまで積み上げてきた技術をもとに、微細・精密加工に適したフォトエッチング技術を活用し、超小型電子部品や半導体の製造に必要な工程用治工具(加工や組立などの工程で製造をサポートする器具)を製造しています。

コーケン化学さんには、操業開始より化学反応を使用した金属加工のノウハウがあります。ここでは様々な部品の製造に使われているフォトエッチングや拡散接合の技術を見ていきましょう。



【技術その1:フォトエッチング】

こちらは、コーケン化学さんのもつ最大の特徴と言っても良いのではないのでしょうか。フォトエッチングとは、厚さ30μm~2mmのとても薄いステンレス板や銅板を素材として、耐食膜を形成した金属などの素材を、薬品によって腐食させ必要な形に加工する技術のことをいいます。

【技術その2:拡散接合】

拡散接合は上記のようなエッチング加工を行った薄板を複数枚積層し、それらを圧力と熱で一体化させる技術です。非常に小さく、深い孔などの複雑な形状を実現させることができます。実物を見せていただきましたが、その精密さにとても驚きました。

これらの技術を駆使して、私たちの生活には欠かせないスマートフォンのカメラ部品である板ばね(VCMスプリング)も製造されています。コーケン化学が属するUPTグループは光学式の手振れ補正システム用のスプリング分野で世界トップシェアを誇り、独自の技術で世界を支えています。



女性社員が活躍する“ものづくり”の世界

コーケン化学さんの女性社員比率は41%と高く、性別問わず活躍できる職場にとっても魅力を感じました。

工場と聞くと男性が多いイメージが漠然とありましたが、コーケン化学さんでは多くの女性社員の方々が作業着を着て活躍されています。中でも、製品検査を行うフロアには比較的女性社員が多かったように感じました。作られた製品は、機械による検査のみならず、人の目によって細かくチェックされていました。コーケン化学さんの緻密な製品を必要とするお客様を第一に考えて働く彼女たちの姿がとても印象に残っています。



学生のうちに…

学生のうちにやっておくべきことをコーケン化学さんの社員の方々に伺いました。卒業後に就職を控える多くの大学生が一度は気になる話題だと思います。

「とことん好きなことをやってほしい。強いて言うならば、様々な人と話せるようコミュニケーション能力を高めておけると良い。」とお話をいただきました。学生のうちに専門的な知識を蓄えることももちろん重要ではありますが、就職した後に学ぶことの方が多いようです。実際、コーケン化学さんには化学系の学科出身ではない社員の方も多く、文系学部出身の方も珍しくない、とのことでした。加えて、会社に入ってから仲間の社員と協力しチームで物事と向き合う機会が多いため、人とのコミュニケーションが重要視されることが何かと増えてくるようです。同じ学科の仲間や、サークル・研究室などのメンバーとのやりとりを日頃から大切にしておくとも良いかもしれません。



コーケン化学株式会社



みんなで教え合い成長できる環境

今回社員の方々に、コーケン化学さんで働く魅力や社内の雰囲気をお聞きしました。

「上司や他の社員からのプレッシャーがなく、のびのびと仕事ができます。」「上司や他の社員に気軽に話しかけることができ、コミュニケーションが取りやすいです。」などのお答えがありました。職場の雰囲気が柔らかく、和気藹々とした環境だからこそ、良い製品づくりに没頭できるのかもしれませんが。

またコーケン化学さんでは、社員同士で互いの専門知識や経験を共有する社内勉強会が定期的に行われているそうです。勉強会では製造ラインの各工程の管理ポイントや図面の読み方、さらにはルールの再確認をしています。このような場があるおかげで、社員の方々はお互いに教え合い、共に成長できるとのことでした。管理部に所属する社員の方は、「製造業はチームプレイで、コミュニケーションが必要不可欠。」と言います。それぞれが主体的に知識を共有する姿勢は、コミュニケーション能力を高める一翼を担っているように感じました。





Interview with 株式会社新鋭産業 by: 横浜市立大学 中西ゼミナール / 池原 興央、川口 典親、深作 祐衣、堀井 咲希

柔軟な発想と確実な生産技術 「いいものをつくる小さな会社を誇りにします」



株式会社新鋭産業

株式会社新鋭産業(以下、「新鋭産業」)は昭和57年から本社を金沢区福浦におき、柔軟な発想力を大切にしながら確かな生産技術を築いてきました。工場内では、一人ひとりがプライドをもって作業している姿が印象的です。「いいものをつくる小さな会社を誇りにします」を社是に、短納期・高品質・低価格・サービスを迅速に提供することを常に目指し、お客様のニーズに多面的に対応しています。

私たちが取材に伺った新鋭産業さんは、主に「プレス事業」、「板金事業」、「金型事業」、「印刷事業」、「組立事業」、「OEM事業」、「品質管理」の7つの事業を展開しています。

機械部品の製造や、アルミニウム・ステンレス装飾部品の製造、金属へのレーザー印刷加工、電子機器の組立てなどのものづくりを行っている企業です。

事業の内容を聞くだけでは、あまり馴染みがなく、直接私たちの暮らしにあまり関係ないのではと思うかもしれませんが、工場見学で様々な製品を見ることで、この会社の製品が身近なところにあふれていることを実感することができました。

車のドアやハンドルに使われる装飾部品、スピーカーの音が鳴る部分の蓋の部品、AED装置の箱や電子タバコ機器の外装などなど、私たちが知らないところで、ここ金沢区から生まれた製品が活躍しています。

新鋭産業さんの若手社員の方々にお時間をいただき、インタビューを行いました。

学生に求める、やっておくべきことや専門性とは

新鋭産業さんが学生に求めることを社員の方に伺うと、まずコミュニケーション能力を身に付けていることが大切だとおっしゃっていました。どの企業でも通じるように、社会において人と関わるうえでの会話力や関係性を築く力を学生時代から身に付けていることを求めています。また、新鋭産業さんは工業製品や機械を中心に扱う会社であるため、事前に工業系の専門知識を持っていないといけないのではないかと考えてしまいますが、採用にあたっては特に機械に関する専門性や技術を前提とはしていないそうです。専門的な事柄は実際に入社してから学んでいけると伺いました。

社員の仕事とプライベート、そしてキャリア設計について

新鋭産業さんでは時間管理を大切にしているようで、残業が少ないうえに、土日の休みが確保されており、プライベートの時間をしっかりととれるそうです。休日には社員同士で釣りに出かける方もいるそうです。プライベートを満喫でき、社員同士で休日を過ごすこともあるのだと分かり、良い雰囲気の会社だと感じました。

社員の方々に、ご自身のキャリアプランをどう考えているのかについて伺ったところ、社内での出世や業界での将来的な立ち位置にそれぞれ展望を持ちながらも、まず自分を高めていく必要があると考えている方が多くいらっしゃいました。取材に対応してくださった社員の方も、そのために今は目の前の仕事を確実にやり、経験やスキルを積んでいきたいと話されていました。また新鋭産業さんは東南アジアにグループ企業を展開し、お客様のグローバル・ビジネスをサポートしています。現在、韓国、中国、フィリピン、ベトナムに拠点があることから、グローバルな人材育成にも力を入れており、語学の研修もあるとのことでした。

今回の取材で私たちははじめて製造業のリアルを見ることが出来ました。普段聞くことが出来ない社員のみなさまのお話や、普段見られない作業の様子がどれも印象に残っています。ものづくりの工場と聞くと多くの方が、物や機械で散らかっている現場をイメージするかもしれませんが、新鋭産業さんの工場は整理がきちんとされており、製造業やサービス業で良く活用される5S(「整理」、「整頓」、「清掃」、「清潔」、「しつけ」)活動が根付いていました。このように働く環境を整えながら確かな技術力を持ち続けている新鋭産業さんはLINKAI横浜金沢の誇りだと思います。

技術だけでなく、 コミュニケーション力も重視する会社

チューブフォーミングさんは、多種多様なパイプ加工を得意とする会社です。
必要としている人材や、仕事のやりがいをお聞きしました。



株式会社
チューブフォーミング

どのような人材を求めているのでしょうか。

チューブフォーミングさんには、営業、製造などさまざまな部門があります。それぞれの部門に必要な技術・技能スキルは異なっていますが、部門を問わず共通して求める人材とは、勉強や研究などすべてのことに全力でのめり込める人、そして、積極的な会話によりコミュニケーション能力を身に付けられる人だそうです。全力で勉強や研究などにのめり込んで取り組んだ行動は、結果として自信に繋がります。

チューブフォーミングさんでは若手社員に、失敗を恐れずに何事にも挑戦することができるよう、試作品の製作を通して、挑戦と失敗できる機会を与えているそうです。実際に若手社員の方が挑戦している作業の様子を見せていただきながら、何事にも失敗をしないように努めることよりも、失敗をしてでも新しいことに挑戦し、全力で取り組むことがとても大切であると教えていただきました。

また、チューブフォーミングさんの取組として、34歳以下の若手社員を集めて話し合いの場を設け、そこで出された新しい課題と解決策を上司の方々に聞いてもらうという場があるそうです。これは、会社が時代に合わせて成長をしていくために、若手社員の新しい意見を会社に取り入れることを大事にしているからだそうです。そのため、コミュニケーションが取れないと、新しい改善点が出て来なくなり、会社の成長や変化に繋がらなくなったり、新たな若手社員の要望に応えることができなくなります。

その他にも、上手にコミュニケーションが取れないと、業務上、部門内や社内の打ち合わせ、社外のお客様に対しても品質や設計の提案などのやり取りもできなくなってしまいます。

このように何事にも挑戦できる人、コミュニケーションがしっかりと取れる人が業務に必要なのだと知りました。

仕事のやりがいやモチベーションについて聞くことで、“働くということ”にイメージを持ってました。

部門によって、やりがいやモチベーションは異なりましたが、どの部門でも共通して、お客様が喜んでくれた時にやりがいを実感できるとのことでした。さらに詳しく取材に応じてくれた担当者の方にお話を聞くと、製造部門の場合には、材料を一から加工して製品として出来上がったときに達成感を得られるとおっしゃっていました。造る過程自体はお客様に見えませんが、製品が出来上がったときや、その製品が実際に使用されて役に立った時に、特にやりがいを感じるのだそうです。また、営業部門の場合には、お客様とさまざまなやり取りをした結果、相手が満足する製品が出来上がったときにやりがいを感じるのだそうです。さらに、社員やお客様がその製品を見て、喜んでくれた時はとても嬉しいとのことでした。

どちらの部門にも社外の方と関わる機会がありますが、そういった機会にさまざまなことを社外の方から学び、モチベーションに繋げていました。たくさんの人と関わる場があることで、新しいことを学べるため、そこから新たな発見やアイデアが生まれるのだと感じました。また、社員の方々にお話を聞いてみて、働くということの具体的なイメージを持つことができました。ただ会社に来て、働くのではなく、コミュニケーションの中で相手の期待に応えるために、製品の設計から製造、完成まで各担当者がそれぞれの個性を生かして、より良い製品が作れるように考える必要があるのだと知りました。会社以外さまざまな人と関わる機会を大切にする中で、自分自身の得意とする分野だけでなく、広い分野の視点から学べることから、コミュニケーションの機会を大切にするのが重要なのだと改めて実感することができました。





株式会社南武

金沢区から世界へ

日本で最初の油圧シリンダーメーカーとして発足した株式会社南武さんは、金型用油圧シリンダーの設計・製造・販売・メンテナンスを一手に手掛ける会社です。自動車メーカーとの取引が多く、南武産の金型用油圧シリンダーは自動車業界で高いシェアを誇り、ものづくりの現場で大活躍しています。

南武さんはLINKAI横浜金沢に本社・工場を置き、その他国内では浜松市に工場があります。また海外では中国、タイに工場を構えており、アメリカに技術提携会社があるなど、グローバルに活躍する会社です。

南武さんは、2014年に経済産業省「グローバルニッチトップ企業100選」に選定されました。グローバルニッチトップとは、それぞれのニッチな分野において、世界市場でトップ企業を指すものです。日本のみならず、海外でも幅広く活躍する南武さんの製品はここ金沢区から生まれています。



ものづくりの現場から脱炭素化社会に貢献する

2020年に超モノづくり部品大賞で日本力(にっぽんぶらんど)賞を受賞した電動油圧アクチュエーター“e-Zero”は、南武さんの主力製品のひとつです。様々な業界から注目されている“e-Zero”はたくさんの受注があり、大量生産に向けて製造部の社員を中心に日々知恵を絞っているとのこと。

この“e-Zero”の特徴は油圧による大きな力を発揮しながら、電動による制御性(位置制御、荷重制御)を兼ね備えているところです。油圧と電気のイイところ取りを高いレベルで融合させた製品となっています。そして従来型の油圧システムに比べ、モーターのアイドルストップ機能により、最低でも65%、最大で90%もの消費電力を削減することができます。南武さんは、積み上げられた技術力を駆使した製品を通じて、ものづくりの現場から脱炭素化社会に貢献しています。



今回、取材に応じて下さったのは、総務部長と営業部、設計部、開発課、製造部に所属する若手社員の4名です。

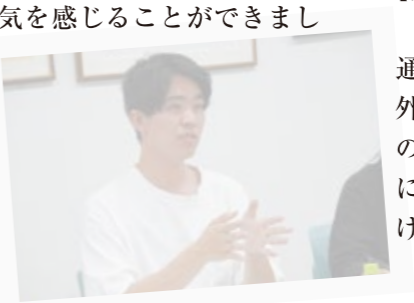
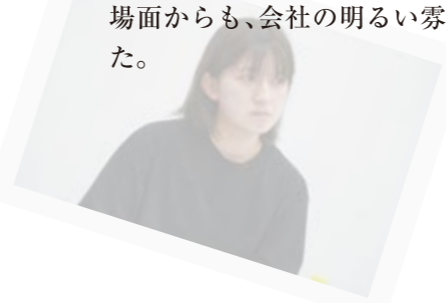
1 会社の雰囲気、働く環境について聞きました。

会社の雰囲気はとても良いと思います。他の部署との関わりも多く非常に協力的で、会社が大切にしている解決、対応力の手厚さと速さに繋がっています。また社員の人材育成にも力を入れており、社内外での様々な勉強会の実施や、週一回の英会話教室、PCのオフィスソフト研修など社員の参加を後押ししています。

働く環境も非常に整っており、部署ごとに良い部分を聞くことができました。

営業部では女性社員も多く、明るい雰囲気です。非常に働きやすい職場です。設計部では、わからないことがあるときには上司に聞きやすく、仕事しやすい環境にあると思います。開発課は、自分がやりたいことにチャレンジしやすい環境がつけられているため、モチベーションも上がるとともに、先輩職員のサポートもあり安心して働くことができます。製造部は、ものづくりと聞くと職人気質の固いイメージがあるかと思いますが、困ったことがあれば気兼ねなく相談できる雰囲気作りができています。

取材時や工場見学の間は、社員同士の明るい会話が聞かえていました。また私たち学生とすれ違うときには、社員の方全員が笑顔で元気に挨拶をしてくれました。このような場面からも、会社の明るい雰囲気を感じることができました。



2 必要な知識と技術、学生時代にやっておくべきことを聞きました。

【営業部の方】

学生時代は、とにかく知識に貪欲になること。何に対しても興味を持つことが大切だと思います。営業をする上で自社製品の強みや製造方法などは必須の知識となりますが、最初は何もわかりません。積極的に知識や情報を仕入れることができれば、社会人になっても、とても役立つはずですよ。

【製造部の方】

学生時代は、研究などを通してプロセスを組み立てること、実行して形にすることが大事だと思います。計画・準備・実験等のプロセスを考え、実行していくことは実際に工場における製造過程と似ていると感じます。学生さんにはぜひ、研究の仕方、プロセスをしっかりと考えて行ったという経験を積んでほしいです。

【設計部の方】

大学で学ぶ製図を身に付けておくと、活躍できる場面が多いかもしれません。自分の学生時代を思い返すと、受けた講義の内容は、社会に出てから実用性がないのではと当時は感じていましたが、南武に就職し設計部に配属されて、学生時代の経験がとても役に立っています。

【開発課の方】

自身の専門分野以外にも目を向けて学ぶことです。希望通りの部署に配属されない場合もありますし、専門分野以外のことで仕事をする場面はたくさんあると思います。その中でも活躍できるように学生のうちから、学ぶ姿勢を身に付けることが大切です。なので、専攻分野以外の授業を受けられる総合大学の強みが活きるはずですよ。



横浜エレベータ株式会社

より安全に、より快適に、 100年のノウハウを提供する会社。

横浜エレベータは、さまざまなお客様のニーズにあわせて、満足できるエレベーターと専門的な技術やサービスを提供してきた会社です。100年の長きにわたり、エレベーターメーカーとしての実績を築き上げてきたその理由を聞きました。



大手メーカーには手掛けることができないエレベーターを造っていました。

突然ですが、みなさんは横浜エレベータさんをご存じでしょうか？実は、日本武道館や銀座歌舞伎座、横浜市役所などのエレベーターを幅広く手掛けている会社です。

建物を見る時や使用する時に、エレベーターを注視する人は少ないと思いますが、社会インフラの一部としてエレベーターは重要な役割を担ってきました。そんな役割を担ってきた、横浜エレベータさんは2023年に創業100周年を迎えたとても歴史の長い会社です。そんなすごい会社をみなさんに紹介します。

横浜エレベータさんは、神奈川県横浜市に本社を置き、金沢区鳥浜町に事業所と工場を設けています。また支店が東京、営業所が大阪、名古屋にあります。手掛けるエレベーターは、私たち人間を運ぶための乗用エレベーターや、荷物

を運ぶための荷物用エレベーター、どちらも運べる人荷用エレベーターなどさまざまで、引火の危険性がある工場内でも使用できる防爆型エレベーターなどもあるようです。主な業務としては、これらさまざまな種類のエレベーターの設計、製造、販売、メンテナンスを行っています。

今回取材して分かったことは、お客様を第一に考えているということです。お客様の要望や設置する建物に合った提案をし、最適なサービスを提供することで、大手メーカーの大量生産型のエレベーターには無い、特別感のある商品を提供していると感じました。また、そのお客様第一の姿勢こそが、縦の交通機関として100年という歴史を作り、技術を磨いてきたのだと感じました。

横浜エレベータの社員の方々に学生目線でさまざまな質問をしました！

学生: 学生を採用する際に意識していることはありますか？
社員: 積極性と協調性、そしてコミュニケーション能力を重視しています。また、これまでの経験がとても大切に、遊び・勉強・部活動など何事にも全力で一生懸命できる学生は、会社に入ってから、仕事を一生懸命してくれる気がします。

学生: 横浜エレベータで働いてよかったと思うことはありますか？

社員: 私はもともと、大学では建築を学んでいましたが、働きながら機械設計を学ぶことができています。新しい知識が得られることは、私の仕事へのモチベーションとなっています。また、働きながら知識が増えるということは、やりがいでありメリットだと思います。

学生: オーダーメイド(受注生産)製品の強みはありますか？
社員: 大手企業が好んでやらないようなものや、嫌うものを我々が請け負うことで、注文してくださったお客様との良い関係が構築できていきます。その結果として、継続して仕事の注文を受けたり、建物をリニューアルする際に再び注文してもらえたりします。

学生: 地域に貢献するために何か活動など行っていますか？
社員: 会社前の路上の清掃や環境に配慮した取組をしています。また、故障しないものを製造し提供することも地域貢献や環境への配慮の一環だと思っています。お客様と地域の方々の両方が満足してもらえるように、これからも活動していきたいと思っています。

Theme 1
Theme 2
Theme 3
Theme 4
Theme 5



株式会社
横浜シーサイドライン



Interview with 株式会社横浜シーサイドライン by: 横浜市立大学 中西ゼミナール / 神崎 篤也、栗原 雅治、須田 逸仁、前田 正信

交通を通じて「当たり前を作る仕事」 横浜シーサイドライン

株式会社横浜シーサイドライン(以下、「シーサイドライン」)は、日々の金沢シーサイドラインの運行や車両等整備を通して、私たちが生活するうえでの「当たり前」を作っています。一方、ダイヤが乱れた際の迅速な対応や日常的な車両の点検・整備が私たちの生活を支えています。そんなシーサイドラインさんでのやりがいや、社員の方々の考える学生時代にやっておくべきことについて取材しました。

シーサイドラインさんは、1983年に第三セクター方式により横浜新都市交通株式会社として設立されました。そして1989年に新杉田、金沢八景間を結ぶ金沢シーサイドラインを開業させました。この金沢シーサイドラインは一般的な鉄道とは異なり、「新交通システム」と呼ばれる交通機関として、自動運転などをいち早く導入してきました。また、2013年には社名を株式会社横浜シーサイドラインへと変更しています。

日常のシーサイドラインの運行や車両等の整備とあたたかな環境が生むやりがい

取材と整備現場の見学の中で、シーサイドラインさんで働くことのやりがいについて、社員の方にお話を伺いました。印象的だったのは、「当たり前を作る仕事」という言葉です。整備の仕事は、「自分で判断する力」、「不具合やいつもとは違う点を見落とさない力」が必要とされ、それらを使って私たちが生活するうえでの「当たり前」を毎日作ることだと話していただきました。「当たり前」と思われることなので、褒められることは少ないようですが、だからこそ不慮の事態を未然に防げることを誇りに思うとのことでした。また、運行ダイヤが乱れた後の対応など、“アクシデントに対していかに早く正常に戻すかが司令員(列車の運行管理や設備の監視を行い、車両故障や急病人の発生に際し、駅係員と連絡を取り状況を伝える業務を担う)の腕の見せ所”と仰っていました。

日々の業務外では、社員の交流イベントや様々なサークル活動が盛んに行われているそうです。実際に取材を通して、働く様子を観察していると社員の方々は親しげに交流しており、あたたかい雰囲気が感じられました。そうした環境が日々の整備や運行の仕事に、よりいっそうの細かな連携ややりがい、責任感が生まれているのだと思いました。

学生時代にやっておくべきことは、自由な時間を生かし自分を高めること。

学生時代にやっておくべきことについて、いくつかの回答をいただきました。学生の本分である勉強の他に、積極的に本を読んで欲しいとのことでした。「本を読んで得た知識に無駄なものはない。学生時代は時間が多くあるので、本を読んで知識を得てほしい」とお話をいただきました。また、シーサイドラインさんでは、入社後に必要な資格取得に向けて学習できる環境も整っているようで、会社に入

るためだけの勉強というよりは、今後の人生のために自分を高めてほしいという想いが感じられました。さらに、“一生の友達となるような親友をつくる”ということや、“同年代以外の人と関わり合いを持つこと”も大切であると教えてくださいました。学生時代に築いた人脈や人間関係は、その後の人生でとても役に立ちます。

そして、どのような人材が欲しいかという質問に対しては、ズバリ、ポイントは3つあり、①「コミュニケーション能力が高い」、②「何事にも意欲的である」、③「素直である」だそうです。これらは学生時代から培うことができます。私たちを含め多くの学生の皆さん！自由な時間を活用して自分を高めていきましょう！

取材を通して、社員の方々が自分の仕事に誇りと責任感を強く持っていることがとても感じられました。また、車両点検の現場を実際に見ることができ、とても貴重な経験をさせていただきました。人と人とのつながりを大切にするととても素敵な企業でした。



- 関東学院大学理工学部
化学学系 友野研究室……鬼塚 咲さん【鬼塚】、黒神 佑芽さん【黒神】
機械学系 堀田研究室……小田 恵隆さん【小田】、守屋 和起さん【守屋】
- 横浜市立大学国際教養学部
都市学系 中西ゼミナール……隅 風渡さん【隅】、堀井 咲希さん【堀井】
- 金沢区役所……【区】



■LINKAI横浜金沢を知っていましたか。

【堀井】 私は金沢区出身で家からも近いので知っていました。ただLINKAI横浜金沢というよりは、産業団地があるくらいです。リネット金沢(LINKAI横浜金沢内にある屋内プール)は小学生の頃に自転車で行きました。

【区】 地元の小学生はLINKAI横浜金沢をどのように思っていますか。

【堀井】 グリーンベルト(※)を越えたら、遊び場がないので行っても楽しくないイメージがあります。

【区】 隅さん、鬼塚さんも知っていましたか。

【隅】 大学生になり、横浜市の六大事業が授業で取り上げられたので、勉強する機会がありました。また僕も横浜市出身なので、この地域に工場が集まっていることは知っていました。

【鬼塚】 コストコやアウトレットに車で買い物に行くので、どんな雰囲気の場所なのかは知っていました。

(※)正式名称「金沢緑地」。産業地区と住宅地区を分ける緩衝緑地。シーサイドライン鳥浜駅から八景島駅付近まで国道357号に沿って南北に4kmほどの長さがある。

■取材前のLINKAI横浜金沢のイメージを教えてください。

【守屋】 工場群のイメージです。金沢シーサイドラインに乗った時に車窓からみる景色が印象的です。

【黒神】 Aozora Factory(産学官連携で実施するLINKAI横浜金沢の魅力発信を目的としたものづくり体験イベント)に参加しているので、その方々のイメージが強いです。今回、Aozora Factoryに参画する企業以外の会社にも取材に行けると聞いて、LINKAIは様々な活動が活発な地域なのかという印象を持ちました。

■取材を通して、LINKAI横浜金沢について知ったことはありますか。

【隅】 工場と聞くと閉鎖的で怖いイメージでしたが、実際に入っ

てみると取材した企業の社長さんは若い方で、自由な雰囲気を大切にしていると話してくれました。工場内はきれいで、こわい方もおらず印象が変わりました。

【黒神】 職人気質な方が工場には多く、黙々と一つの作業をこなす印象がありましたが、アットホームな雰囲気で楽しそうに仕事をされていたり、女性が多かったりと、印象がガラッと変わりました。

■見学・取材をして「働く」ことにどのような印象を受けましたか。

【黒神】 インターネットで、いわゆるブラック企業の書き込みを見て、「働く」って辛いことなのかとマイナスイメージがありましたが、有給休暇をはじめとした制度が整っていて、プライベートの時間を大切にしている方も多かったので、両立できるイメージが付きまして。

【隅】 仕事というと、組織が何より大切という印象がありました。あまり個は出せず組織の一員になって働く感じです。ですが、工夫して残業を減らす、仕事量を調節するなど、個でも主体的に動けることを知りました。また、組織的に社員が休めているかなどを気にかけてくれる感じもあって驚きもありました。

【小田】 働く様子を見学して、みなさん真剣に仕事に向き合っていますが、インタビューの時は打って変わって、話しやすい雰囲気でごんな質問していいのと思ったことも聞けて、ONとOFFの切り替えがしっかりしているなど感じました。

■就職を控え、働きたい企業や企業選びで注目するポイントを教えてください。

【守屋】 チャレンジできる環境、失敗できる環境があるといいと思います。資格などの勉強を積極的にさせてくれるような企業に入りたいと思っています。研修も充実しているとありがたいです。

【鬼塚】 私は人間関係を重視しています。今回の取材では和気あいあいと仕事をする様子を見ることができ、上司の方にも話しかけやすいと伺ったので、そんな職場がいいなと改めて感じました。

【隅】 働き続けることを考えると、好きかどうかよりも継続できるかを考えることも大事ななと思いました。そのために達成感



ややりがいが必要だと思っています。仕事でしか味わえない達成感ややりがいを見つけられることを重要視しています。

■この企画に参加した感想をお聞かせください。

【堀井】 率直にとっても楽しかったです。私は昨年に引き続き2回目の参加となりましたが、2社とも楽しかったという印象が強く残っています。働く方のお話を聞く機会は中々ないので、勉強になりました。就活だと人事の方に気を遣って、素直に質問できないこともありますが、こうした機会だからこそ本当に気になることを聞けたのでいい経験になりました。

【守屋】 インタールとは違った良さがありました。インタールでは社風なども聞けないですし、今回の取材では社長さん本人から話を聞けたので、貴重な体験でした。実際に自分の目で見る大切さもわかりました。インタールでは実技が多く、質問はあまりできなかったのですが、バランスが大事ですね。

■この企画を通して、友達や後輩に発信したいことはありますか。

【堀井】 金沢区には頑張っている企業が集まるすごい地域があるんだぞと発信したいです。産業団地には暗いイメージもあるとは思いますが、実際は明るい方々が多く、国内外で高いシェアをもつ製品を作る企業もあって、今では誇りに思っています。

【小田】 これだけの企業が集まっていて、業種も様々なので就職先の候補を探してみてもいいかなと思います。この企画を通してLINKAI横浜金沢を初めて知りましたが、もっと広まって欲しいです。

【鬼塚】 LINKAI横浜金沢では多くの女性が働いていたり、文系理系問わず、色々な仕事があることを伝えたいです。

【隅】 取材前は何かを作っているのかわからないけど、話を聞くと普段使っているものが身近な場所で作られていることがわかりました。一部の部品を作る企業も多く、目立ちにくいのかもかもしれませんが、替えの効かない仕事だなと感じることがたくさんありました。

【黒神】 取材を通して、企業のことや働くことについて知ることができました。知らないって損だなと思ったので、知って欲しいです。知るきっかけ作りが難しい方には是非この冊子を読んでもらってほしいです。



「キックオフミーティング」の様子

KICK

OFF

MEETING

LINKAI 横浜金沢

学生が

取材に行く

働きがいのある職場

だったと気づいた件

企業の取材にいくので、怖い企業だと嫌だと思ったら、働く人達は気さくで良い人が多い



関東学院大学
×
横浜市立大学
学生による学生のための
LINKAI 横浜金沢

著作・編集学生一覧 Students List

(株)ウイッシュボン
関東学院大学 友野和哲研究室：
宇佐 環樹、松井 誠実、吉野 暖人、花谷 明信、佐藤 匠

(株)新鋭産業
横浜市立大学 中西正彦ゼミナール：
池原 興央、川口 典親、深作 祐衣、堀井 咲希

(公財)神奈川県予防医学協会
横浜市立大学 中西正彦ゼミナール：
國分 咲良、谷 勇輝、中村 恵杜、山神 碧伊

(株)チューブフォーミング
関東学院大学 堀田智哉研究室：
佐藤 秀哉、茂田 雄哉、将基面 京、守屋 和起

協立金属工業(株)
横浜市立大学 中西正彦ゼミナール：
伊藤 乃愛、隅 風渡、増村 夏帆、横井 日向

(株)南武
関東学院大学 友野和哲研究室：
須田 理華子、山口 莉音、大川 諒輔、瀬沼 愛佑梨、阿部 真弓

(株)グリーン
横浜市立大学 中西正彦ゼミナール：
稲福 そら、島田 咲都、保井 三奈、山口 輝

横浜エレベータ(株)
関東学院大学 堀田智哉研究室：
小田 恵隆、武田 篤也、松田 理久、山本 青汰

コーケン化学(株)
関東学院大学 友野和哲研究室：
鬼塚 咲、佐々木 涼、黒神 佑芽、阿部 真弓

(株)横浜シーサイドライン
横浜市立大学 中西正彦ゼミナール：
神崎 篤也、栗原 雅治、須田 逸仁、前田 正信

編集後記 Editor note

今回が第2弾となった「学生が取材に行く」も無事完成の日を迎えることができました。第1弾から引き続き“学生による学生のためのLINKAI横浜金沢”をテーマに掲げ、第1弾のパワーアップを目指して企画がスタートしました。

冊子の発行に協力いただきました関東学院大学の友野研究室・堀田研究室及び横浜市立大学の中西ゼミナールの学生・先生方と共に約1年間にわたる長期の企画を完走できたこと本当に嬉しく思います。

普段のコミュニティを飛び出し、積極的にこの企画に参加してくれた学生の皆さん、取材の準備から記事の執筆までお疲れ様でした。慣れない取材で緊張や戸惑いもあったと思いますが、企業の魅力を少しでも多く引き出そうとする皆さんの前向きな姿勢がとても印象的でした。

今回取材を受け入れていただきました全10社の企業の皆さまにおかれましては、お忙しい中丁寧な準備を進め、温かく学生を迎え入れていただき、ありがとうございました。この場をお借りして感謝申し上げます。皆さまの働く姿を目の当たりにした学生たちは、改めて働く大人のかっこよさを実感したことと思います。取材後に実施した学生座談会では、学生が感じた素直な気持ちを話してくれています。この気持ちが皆さまに届き、各企業の事業を通じて、LINKAI横浜金沢の更なる活性化に繋がれば幸いです。

そして、この冊子をご覧になった皆さまが、LINKAI横浜金沢の企業を知るきっかけになり、魅力を感じ、LINKAI横浜金沢で働く一助になることを願っています。

結びにこの企画に関わっていただいたすべての関係者の皆さま、至らぬ点多々あったかと思いますが、ご対応くださりありがとうございました。改めて厚く御礼申し上げます。